

D—1 肥満児の経過観察

東京学芸大 井上 義朗

1. わが国で現在増加している肥満児が、将来成人に至るまで肥満をもち越すであろうか、また小児期からの肥満が、成人病とどの程度関連があるものでであろうか。肥満児が小児保健上、社会上の問題となつてから、未だ10年に満たず、結論をみるに至っていない。欧米の文献によれば、小児期に発症した肥満は治療に対して抵抗性が強いし、早期に始まるほど予後が不良であるといわれている。わが国に於て肥満児が如何なる傾向を辿るかは、興味ある且つ重要な課題と思われる。

2. 昭和40年以降、私の取扱った肥満児およそ400例のうち、1年以上経過を追求し得たものを対象とした。家庭養育環境の調整として、1)正しい健康観の確立、2)育児態度の反省、3)運動制限をとくこと、4)食べることに集中をとくこと、などを説き、食餌は低カロリー、高蛋白質、低含水炭素、中等度脂肪食とし、小児の発育を考慮に入れた上、年令と肥満度に応じてそれぞれ指示を与えた。

3. 対象のほぼ1/3は、肥満状態が持続しており、これ等の症例では“やせたくない”と主張しているものや、肥満の及ぼす影響を説いても無関心でいるものが多くみられた。軽度肥満のものは、高度肥満のものに比べて治療効果が良好である。